

修羅

壽要端川

砂子屋書房

の宴

吉本隆明と私



著者略歴

川端要壽（かわばた ようじゅ）

大正13年6月10日 岐阜市に生れる。横浜高等工業学校電気化学科卒。各同人雑誌を経て、昭和57年 徳間書店より『墮ちよ！ さらば』上梓。

現住所 埼玉県戸田市下戸田 2-31-20-605

修羅の宴——吉本隆明と私——

1986年12月10日 初版発行 定価1600円

著 者 川 端 要 壽

発行者 田 村 雅 之

印刷所 金 井 印 刷

製本所 並 木 製 本

発行所 東京都千代田区 砂子屋書房
内神田 3-4-7

© 1986 Youju Kawabata

砂子屋書房

吉本隆明と私

川端要壽

修羅

の宴



修羅の宴——吉本隆明と私——

青春の残像 9

結婚 49

涙が涸れる 99

ボロ家の憂鬱 143

彼岸 193

慟哭 235

附録

近代文学の宿命 吉本隆明 285

——横光利一について——

あとがき 314

修羅の宴——吉本隆明と私——

装丁 画
三嶋 吉岡
典東 憲

青春の残像

金が欲しい。――

飢える思いであった。失業していたからではない。勿論、小遣が欲しいなどという甘ったれた気持からではなかった。

競馬で身を灼きこがし、破滅の道を突っ走り、不義理をしつくして、にっちもさっちもいかなかった。

確かに、競馬もしたかった。しかし、競馬には資金がいる。そんな競馬への資金があるならば、苦しむ必要もない。

何で、競馬なんかに溺れたのだろう。儲けたいからなのか。違うんだ。競馬は、麻薬なんだ。儲けたその金は、翌日の単なるチケットに過ぎないんだ。競馬は儲けてやめられず、損してやめられない麻薬なんだ。登山家は言う。そこに、山がある。だから、登るんだ。それと、同じであった。競馬を開催^アっている。だから、行くんだ。

その原稿を書き上げるまでに、足かけ十年かかった。書き終ってみたら、たった百枚足らずの原稿だった。

この十年の間に、私の生活はどろどろになった。稿を起し始めたとき、教科書会社・東京書籍のまともな編集部員だった。順送りで組合の執行委員になり、レッド・パージ反対で赤旗を振っ

て、辞めて、二十七年から貸本屋。競馬を覚えて廃業。三十二年に帝国秘密探偵社の紳士録編集部員。世話する人があって、三十四年に警察庁本庁に入り、電送課に転職。競馬をやりたくてもやれないほどの薄給にいたたまれず、たった一年で銀座西金堂時計店に移り、貴金属・時計類のセールスマン。この店も、競馬資金欲しさに品物を質屋にぶちこみ、にっちもさっちもいけなくなって、昔、同人雑誌仲間であり、友人だった辻史郎を頼って名古屋へ遁走した。——
しかし、その原稿だけは発表したかった。私の青春が淀んでいた。どうしても、金が欲しかった。

吉本隆明と、下谷の墓地を散歩しながら、「文学者の戦争責任」を語り合っていた。悲憤慷慨しながら、二人で上野に出て、焼酎を飲んだ。

「よしッ、俺も書くぞ、戦中時代を」

「おう、書けよ。日本には、レジスタンス運動はなかったけど、君の戦中時代の青春は、立派なレジスタンスだよ」

吉本は、私をおだてた。

書き出して、十枚も書かないうちに、行き詰まって書けなくなった。東京書籍をクビになり、生活に追われた。書かなくなった。

吉本は、三十年ごろから、文学者の戦争責任について、発表し始めた。「高村光太郎ノート——戦争期について」、前世代の詩人たち——壺井・岡本の評価について」。

その頃、十条の貸本屋へ一カ月のうち四、五回吉本は遊びに来た。彼は無職だった。一日中、椅子に坐り、「山手樹一郎作品集」を読み耽っていた。帰りぎわ、言った。

「例のやつ、書けたか」

「書けない」

「書けよ」

三十一年九月、吉本は武井昭夫と共著の『文学者の戦争責任』を文庫本で、淡路書房から出した。最初の商業出版物だった。

刺激されて、またぞろ書き始めた。遅々として進まなかった。三十二年になると、『文学者の戦争責任』は売れなかったとみえて、ゾッキ本屋に並び始めた。私は、書く情熱を失った。

三十五年、吉本は安保闘争に生命を賭けた。挫折に終わった。もう、その頃彼は新進評論家として、また現代詩人として不動の地位を築いていた。

「書けよ」

「うん、こんどこそ書く」

「俺もいよいよ、雑誌を出すことになった。九月になるかな」

「何という雑誌だ？」

「『試行』というんだよ」

私は無職だった。競馬にいく金もなかった。終日、書いた。やっと書き終えた。

ちなみに、「青春の残像」の梗概を次に記す。

私（佐伯恭彦）は、昭和十六年十二月、大東亜戦争の勃発した月に、第一級軍需工場の日本光学工業株式会社に入社する。東京府立化学工業学校を同時卒業した同級的小林重幸、原志津夫の二人と一緒にあった。

入社当初は、私たち三人は何の不満もなく、毎日退社後、卓球にうちこんでいたのである。戦争に対する不安のかけらなど、どこにもなかった。

年があけて三月のある日、私と原は、小林から突然にある重大事をうちあけられる。小林は会社を辞めて、受験するために予備校へ行く、というのである。私たちは、彼の真情をはかりかねたが、どうやら高等工業学校へ入学して、兵役延期をねらっているふうに思えた。私には、ショックだったのである。

が、その計画を実行することは容易でない。府立化学工業学校は実業学校である。この昭和十七年度から、文部省は実業学校出の上級学校への進学を阻止するために、一割制限令を設けた。つまり、厳密な意味ではなかったにしろ、クラスの成績上位一割しか受験資格が与えられない、というものである。が、小林は私と同様の劣等生であったにもかかわらず、それについては楽観視していた。

「徴用がかかってしまつてからでは、辞められなくなる。すぐ辞めたい」と、小林は言った。

私も原も、この小林の発言に悩まされる。その日より、徴用制度の持つ鉄鎖の重みは、私の心を締めつけるようになる。が、会社を辞めるといふ決心は、まだ私にはつかなかった。

そんなある日、私は同級生ではあったが尊敬していた吉本隆明を訪れた。相談しに行ったのである。吉本はそのとき、米沢高等工業学校応用化学科に入学が決定していて、米沢に行く日を待つばかりだった。私は軍隊への拒否、死への恐怖感などおくびにも出さずに、日本光学へ入社した途端、化工卒という肩書は通用しない、どうしても高工へ進学したい、旨を彼に述べる。すると、吉本は「おれには、もういらなくなったものだ」と言いながら、彼が受験勉強に使用していた参考書をそっくり私に呉れたのである。その時点で、私の受験への決意は固まったのだ。

昭和十七年六月一日付を以って、私は徴用を受ける。期間は十九年五月三十日までである。十九年になると、私は兵隊検査を受け、そのまま軍隊へ行かなければならない。私は絶体絶命の境地に追いこまれた。なぜ、私は徴用される前に退社しなかったか。私の場合、理由は歴然としていた。経済的にそれは許されなかった。父は一介の鉄工所の職工である。府立化工を卒業させるだけで精いっぱいであり、とても高等工業学校へ進学させるほどの資力はなかった。父が私の受験を許した条件は、「自分で学資をかせいで行くがいい」ということであつた。とても、小林のように予備校へ通うどころではなかった。

徴用がかかった翌日から、私は正式雇傭となり、勤務時間も午前八時から午後六時までとなつて、家に帰ると七時半、私が受験勉強に精を出す時間はせいぜい四、五時間ぐらいであつた。私

は暗澹とする。

六月末の日曜日、私は同じ小岩に住んでいる、恩師の立田先生を訪れた。先生に甘えたかったのだ。先生は私の話に耳を傾けると、「合格すれば、会社を辞めさせて貰える可能性はあるんですね」と言いながら、「私と同じ病気になるなさい」とすすめる。先生は、肺病であった。「病氣であるということは、体が悪いということではなくて、体が悪いという証明書の問題ですよ。アハハッ……」

二日後、私は午後から早退すると、新小岩にある吉野医院の扉を開いた。私は診察して貰ったが、まったくの健康体であった。しかし、私には立田先生の言葉は絶対であった。私は吉野院長に事情を話し、「病氣にして下さい」と懇願する。医師は納得してくれて、「僕の高等学校時代の友人にAという男がいてね。軍隊生活に耐えきれず、脱走を図ったんだ。——銃殺されたよ」私は戦慄を覚えた。しかし、医師は診断書を書いてくれた。『肺門淋巴腺炎 三カ月の休養を要す』だった。私は七月の初めから、職場を去ったのである。

九月の初旬、私は東京市助教員試験を受け、合格し、下旬に江戸川区立鹿本小学校に奉職したが、僅か三日間で退職させられ、十月一日から再び日本光学へ引き戻された。徴用という国家権力に抗うすべもなかった。八月十八日に立田先生は亡くなっていった。また戦局は、そろそろ敗戦への軌跡を画き始めていて、七月のミッドウェイ海戦の敗北、八月七日のガダルカナル島及びツラギ島の米軍上陸、十二月三十一日には、ガ島撤退が開始された。

昭和十八年二月、吉本隆明から私のところに一枚の葉書が舞いこんだ。彼はスキーで足を挫き、学期末試験が終わったので、葛飾・上千葉町の家に戻ってきたのである。私はその通知に感動し、早速彼を訪れた。リヤカーで、彼を亀有の病院へ運んだりして、彼の家へ戻ってくると、その晩夜を徹して彼と語り合った。吉本はこの一年間のうちに、すっかり変っていた。酒の話、宮沢賢治のこと、横光利一、高村光太郎、保田與重郎、小林秀雄、太宰治等が限りなく、彼の口からはとばしり出る。この日、吉本が私に語ったことの中で、最も印象的であったのは、次の言葉である。「日本は米国に絶対勝つ。独ソ戦はどちらが勝とうが、いずれは日本と独ソ戦の勝者は、再度戦わずにいられない。それが現代世界史の宿命なんだ。そして、日本は勝つ」。吉本は典型的な右翼学生となり、〈聖戦〉に賭けていた。

十八年三月、私は第一高等学校理科甲類を受験した。劣等生であった私には無暴な行為であったが、私には他に受験できる学校がなかったのだ。それより先、一月の末、私と小林は連れだつて、府立化工を訪れていた。推薦書を貰うためである。しかし、電気化学科長池谷先生から悪罵を浴びせられただけであつた。

私が調べたこの高等工業、高等学校でもすべて受験提出書類中に成績証明書を必要とし、実業学校卒業者の場合は出身学校長の推薦書添付のこと、とあつた。私が志望していた横浜高工しかりである。しかし、ただ一校例外があつた。一高だつた。つまり、願書に出身校と希望学科を書き入れればよく、二次試験の際に、成績証明書（内申書）が必要、とはつきりうたつてあつた